INFORMATION Circular

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第30会大会を終えて……平林民雄……1
■会長挨拶……岡田益吉……1
■運営委員会議事録……3
■総会議事録……8
■第17期　日本学術会議会員の選挙結果……10
■第30回日本発生生物学会大会雑記……箕田康一……11
■学会参加感想記……矢沢隆志……11
■Meetingにまつわるエトセトラ……大隅典子……12
■第13回国際発生生物学会参加記……田村宏治……14
■国際発生生物学会に参加して……八杉貞雄……16
■集会案内……19
■公募案内……29
■会員異動……34
■入会案内……37

NO.87

JULY　1997

日本発生生物学会

〒153　東京都目黒区駒場3－8－1

東大・院・総合・生命環境系(生物)

会　　長：〒 300　茨城県土浦市湖北２丁目５－10
岡田益吉（Tel: 0298-22-7348, Fax兼用
e-mail: flyokada @ biol. tsukuba. ac. jp
drok7 @ da2. so-net. or. jp

ＤＧＤ編集主幹：〒 739　東広島市鏡山１－３－１
広島大学理学部遺伝子科学専攻
嶋田　拓（Tel:0824-24-7446）
（Fax:0824-24-7498）
（e-mail:dgdedit @ ipc. hiroshima-u. ac. jp）

事　務　局：〒 153　東京都目黒区駒場３-８-１
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境系
Fax: 03-3485-2904（生命系事務室）
（この場合は必ず浅島の名前を入れて下さい）
（幹 事 長）浅島　誠（Tel: 03-5454-6632(直通)）
（Fax:03-5454-4330(研究室)）
e-mail: cmasa @ komaba. ecc. u-tokyo. ac. jp
（庶務幹事）松田良一（Tel: 03-5454-6637(直通)）
e-mail: cmatuda @ komaba. ecc. u-tokyo. ac. jp
（会計幹事）福井彰雅（Tel: 03-5454-4397(直通)）

学会センター：〒 113　東京都文京区本駒込５－16－９
財団法人　学会事務センター
日本発生生物学会担当係（Tel: 03-5814-5810）

日本発生生物学会への入退会，住所・所属変更，会費納入，および出版物（ＤＧＤ，インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については，上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。

サーキュラーへの投稿募集

日本発生生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年３回発刊されます。学会に対する提言，研究雑感，実験手法，学会見聞記，関連学会案内，書評等どのような内容でも結構ですので，是非事務局にお寄せ下さい。

宛先：〒153 東京都目黒区駒場３－８－１
東大・院・総合・生命環境系(生物)
日本発生生物学会事務局
Fax: 03－3485－2904（担当 浅島）

第30回大会を終えて

大会準備委員会委員長　平林　民雄

学会員及び関係委員の皆様のご協力により第30回大会を無事（？）終えれたことを先ずは感謝したい。あわただしい３日間であったが、学会のために少しは役にたったという自己満足と一仕事終えた充実感を得ることができた。

第１日目、口演が開始するまでの事務手続きは大変であった。一応の予行演習は前もってしておいたものの、些かの混乱が生じてしまった。受け付けはしたものの、大会費が未払いであったり、大会費は指導教官が払うはずとの抗議を受けたりしてしまった。学会員は全て紳士、未払いのままのものは後に払っていただけたが、何しろ素人が担当していることですから、経理上正確に仕事を進めるには皆さんの協力が必要であることを痛感した。

些細なことではあるが、傘の貸し出しも後味の悪いものになった。大会１日目夕刻、にわか雨があった。係りの機転で、近くの店から簡易な傘を買い込み、離れたワークショップ会場に移動する人のために貸し出した。翌日は晴天であったが返却されたのは半分弱。物あまり現象の一つであろうか、学生に「借りた物は必ず返せ」とは言えなくなった。

学会を大きくするばかりではなく、紳士的研究集団にしたいものである。

ご　挨　拶

岡田　益吉

二期目の任期の半分が経過したところで、一言ご挨拶を申し上げます。このご挨拶をお読みになる会員の中には、Snowbird で行われた国際発生生物学会議に出席された方が大勢居られることと思います。多分、学問に国境は無いことを初めて実感として味わった新進気鋭の発生学徒も、充分経験を積まれた熟年の研究者もそれなりに大きなおみやげを持ち帰られたことと確信いたします。最近は情報伝達手段が発達し、しかもそれがあっという間に広く普及したために、わざわざ外国へ行ったり、国際会議に出席したりすることの価値が小さくなったと思っておられる向きもあるように感じますが、研究遂行の主体が人間である限り、直接顔を合わせての discussion が最も実り多いものであることは今も昔も変わりません。Snowbird での総会で国際発生生物学会の新しい規約が承認され、日本発生生物学会の会員は全て国際発生生物学会の会員となりました。会員の皆様には今後もますます良い研究をされ、その成果を世界に向けて発信されるよう祈ります。もちん、ＤＧＤ

に論文を発表されるのもその手段の一つであることは従前通りです。

また、discussion は必ずしも外国の研究者とだけするものではないことはいうまでもなく、毎年開かれる大会も、その意味で本学会の役割の中で重要なものの一つであります。本年度の大会は筑波大学で開催されましたが、大変見事な運営で、また植物発生学研究者に是非発生生物学会に加わっていただきたい、ということを希望して開かれたシンポジュウムも盛会でありました。貴重な研究時間を割いて、大会開催のために大変な努力をして下さった、筑波大学の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

ＤＧＤの発行を Blackwell に委託して、歴代会長の胃痛の原因となっておりました経済的問題が解決したことは大変喜ばしいことであります。外国におけるＤＧＤの評価も少しずつ上がり、国内のみならず、国外からも優れた論文が投稿されるようになったことも大いに嬉しいことで、歴代編集主幹の努力が着々と実を結んでいることと感謝しております。その一方、出版社が外国にあるために、会員にご不便をおかけしている点もありますし、また本年第一号の会員への配布が甚だしく遅れたことは残念なことであります。しかし、これらはいずれも嶋田編集主幹、浅島幹事長のお骨折りで、原因がほぼ判明いたしまして、その対策もとられました。今後は順調にいくものと思いますので、今しばらくご寛容の程をお願い申しあげます。

さて、学会のもう一つの役割として、会員の研究費獲得の手助けをすることがあります。Circular 第86号に事務局がまとめてくださった各種助成金、賞などの申請に関する情報が掲載されております。これらは日本発生生物学会からの推薦が出来る（推薦したものが必ず採択されるわけではないにしても）ものでありますし、毎年募集されるものも多々あります。従来は、申請が出された段階で、その都度最も良いと思われる方法で、推薦順位を決定して参りましたが、必ずしも常に最良の方法を採れたとは限らないと感じておりました。そこで、今回運営委員会の了承を得て、助成金等推薦委員会を作っていただきました。次年度までには委員の選出の適切な方法を運営委員会で審議していただくようお願いするつもりでおりますが、今年度は、とりあえず運営委員の投票によって、委員会構成員を決め、さっそく今年度より活動を開始したいと思っております。日本発生生物学会から推薦出来る人数が決められてくるものが多いので、申請された全ての方を推薦できるとは限らず、時には心の重い役割ではありますが、委員に選ばれた先生方には何卒よろしくお願いいたします。

最後に、もう一つ重要なことを申し上げます。来年は日本発生生物学会の規約に定められております、10年毎の反省の年であります。今回どのような方法で反省を行うかは、浅島誠先生が中心になって計画が進行中であります。しかし、どんな方法であれ、結局は会員各位のご意見が最も重要であります。いずれ、ご意見を伺うようになるかと思いますので、その時はどうぞ積極的に貢献して下さるようあらかじめお願い申しあげます。

運営委員会議事録

平成９年５月２６日　午後４時～７時まで　筑波大学大学会館第３会議室にて

出席者；岡田益吉、片桐千明、嶋田拓、安部慎一、中辻憲夫、団まりな、仲村春和、西田宏記、平林民雄（大会実行委員会委員長）、高橋三保子（会計監査委員）、浅島誠（運営委員、幹事長）、福井彰雅（会計幹事）、松田良一（庶務幹事）

会長挨拶に引き続き報告、審議に入った。

幹事長報告（浅島誠幹事長）

・第７期日本学術会議会員の選挙が終わった。結果については近日中に発表される予定である。

・各種団体の助成金についてはサーキュラー86号に載せてあるので参照されたい。応募希望者は締切りの１ヶ月前までに学会事務局に書類を提出して欲しい。

・学会会員主催によるシンポジウムの広報にサーキュラーを利用して欲しい。

・大会発表者にもかかわらず、入会手続をしていない人が相変わらず多く、大会準備委員会に多大な迷惑をおかけした。昨年の京都大会でも同様なトラブルがあったが、今年はさらに未入会発表者数が増加したので注意して欲しい。今大会の受付に未入会発表者の名前を掲げ、入会手続をしていただくことにした。このため大会開催期間中に受付にて手続きを行った。そのため大会本部にお願いして２名の方に受付にいてもらった。そのアルバイト代は事務局が負担した。尚、最近、入会手続を終えられた方の名前も掲げられている可能性があるが、その点はご容赦いただきたい。

・次年度（98年１月）からの学会事務局については、東京都立大学の八杉貞雄教授にお願いしご了承をいただいた。

庶務報告（松田良一庶務幹事）

・５月23日現在の会員数　国内一般会員955名、学生会員315名、賛助会員11名、在外会員45名の計1326名である。去年は会費を４年以上未払いのままであった会員72名（除名した）を含めていたので実質的には会員数は順調に増加している。

・昨年の大会発表者の中で昨年度中に入会手続、会費納入を怠った者が７名もいた。指導教官または共同研究者に連絡し、手続を促していただいた。しかし、すでに帰国した留学生１名については会費未納のまま終わってしまった。

・昨年は会長及び運営委員の選挙に伴って会員名簿の改訂版を作ったが、名簿に入力ミス　があり、ご迷惑をおかけした。そのためサーキュラー85号、86号に修正・追加版

を差し込んだ。

・筑波大学の大会実行委員会で会員のメールアドレスが整理されフロッピーに入れる作業が行われた。学会事務局でも緊急連絡用として利用出来るものあるので、アルバイト代として５万円を事務局から支出した。

大会委員長報告（平林民雄大会実行委員会委員長）

・今年の大会要旨集の体裁を従来のＢ５判からＡ４に変更した。年々、厚くなる用紙集に対して、持ち運びを便利にしたためであるが、ご意見があれば、又、伺いたい。

・プログラムの一部に印刷ミスがあり、ご迷惑をおかけした。会員の皆様には訂正内容をメール、ハガキ等でお知らせした。

・会費未納発表者者、本学会への未入会発表者の合計が今回、発表者290名中102名もいた。今回は会費徴収のためにアルバイトを２名（アルバイト代は事務局が支出）追加した。会費徴収業務は今後、事務局で対応していただきたい。

・岡田会長の発案になるシンポジウム「高等植物における発生システム」など、様々な企画がある。ハイレベルな発表と活発な議論を期待している。

ＤＧＤ編集委員会報告（嶋田拓編集主幹）

・1997年の１号（Vol.39, No.１）の発送が遅れてご迷惑をおかけした。ブラックウェル社からの発送が手違いで航空便のところ船便になってしまったのが原因であった。３号にブラックウェル社からお詫びの言葉が入る予定。

・本年１月以降本日までに投稿された論文は53編である。去年からの継続分も加えて63編を取り扱っている。採択率は今のところ66％。

・1997年１号から表紙のデザインを変えた。ご意見を伺いたい。

・カラーページ代が無料の国際的ジャーナルもあり、ＤＧＤの高額なカラーページ代について投稿者から苦情が多い。そこでブラックウェル社と交渉の結果、現行のカラーページ代は最初のカラーページが約10万５千円、次ページ以降１ページ当たり２万円となっているが、それらをそれぞれ８万４千円、１万６千円に値下げすることにした。しかし、別刷り代のカラーページ代はこれまでと同様、全額著者負担である。この点についても、ブラックウェル社とも交渉を進めていきたい。今後、これらの点について学会の方から一層の財政援助があると、ジャーナルの魅力と質の向上をはかる効果があると思われる。

・投稿数が増えたがＤＧＤは隔月の発行であり、論文受理から刊行まで６～７ヶ月もかかっている。これではジャーナルの評価、投稿率にも影響することが危惧される。そのため、ブラックウエル社に交渉し、４、５号で増ページを行ない、受理論文の刊行遅滞を解消することにした。今後、受理から刊行までの期間の短縮をすべく努力したい。

次年度大会予定（安部慎一次年度大会実行委員会委員長）

・1998年５月28日（木）～５月30日（金）に熊本市産業文化会館にて行う予定である。懇親会も行う予定。アクティブな大会になるよう準備を進めている。市内には討論の場も多く、多数の参加を期待している。

審議事項

・特別会計の新設とその運営

特別会計枠の新設が浅島幹事長より提案された。従来の特別会計はＤＧＤ基金が主体であったが、今回の特別会計枠は、これとは異なり、学会運営の健全化のために設けるものである。この予算枠を使って学生会員の会費見直し、大会参加費の見直し、学会旅費の補助、カラーページ代・別刷り代の補助等を行う可能性が議論された。

結局、40巻から最初の１ページ分のカラーページ代の一部３万４千円を学会負担（著者負担は５万円）とすることで合意した。投稿規定の変更とその広報は編集委員会とブラックウェル社にまかせる。今後とも、学会予算の推移を見つつ、日本発生生物学会会員の研究活動と学会の活性化をはかる事業に特別会計を使うことで合意した。

・会計報告および審議

福井会計幹事より1996年度の決算（表１参照）が示された。

残っていたテレホンカードは星、田沢、浅島各会員のご尽力で完売された。

高橋三保子会計監査委員より会計監査報告があった。平成９年４月13日と14日に東大教養学部にて三菱化成生命研の富樫伸会員とともに会計監査を行い、収入、支出、書類の記録管理等が公正に行われていたことを確認した。

1996年度の決算は審議の末このまま総会にはかることで承認された。

福井会計幹事より1997年度の予算（案）（表２参照）が提出された。

1997年度の予算（案）は審議の末、このまま総会にはかることで承認された。

・ＩＳＤＢ（国際発生生物学会）と日本発生生物学会との関係

今年の７月、アメリカのユタ州のスノーバード大会でＩＳＤＢの規約改正が議題に上っていることが岡田益吉会長より報告された。もし、改正が行われた場合、日本発生生物学会のおける役割やソサエティーメンバーとしての本学会がＩＳＤＢに支出する会費が変化する可能性がある。ＩＳＤＢからの会員への広報が不十分であるので、情報の速やかな伝達について申し入れることで合意した。

・「10年目の反省」について

浅島幹事長より来年の熊本大会で本学会恒例の「１０年目の反省」を行うことが報告された（サーキュラー86号参照）。その検討資料をサーキュラー88、89号に載せる予定で相沢慎一会員と作業を始める旨、提案があり了承された。

(表1)

1996年度決算

＜一般会計＞

収　　入

摘　　要	金額(円)
学会費	15,713,600
賛助会費	420,000
文部省学術誌刊行補助金	6,300,000
バックナンバー	14,400
広告代	390,000
雑収入	76,536
大会開催校より寄付	450,000
テレホンカード売り上げ	180,000
利息	8,234
小計	23,552,770
次年繰越金	5,422,007
合計	28,974,777

支　　出

摘　　要	金額(円)
ＤＧＤ刊行費	6,299,953
ＤＧＤ編集費(前年度未払分)	500,000
ＤＧＤ編集費	2,000,000
学会事務センター業務委託費	1,558,009
発送費	1,656,797
諸経費	192,188
ＤＧＤ保管費	129,780
サーキュラー印刷費※	604,301
要旨集印刷費	843,836
大会援助費	250,000
運営委員会経費	206,797
事務局経費	168,784
雑費（学会負担金）	75,450
会員名簿作成費用	697,866
選挙諸費用	256,686
人件費（大会時入会受付、名簿作成、サーキュラー編集）	68,000
特別会計	6,000,000
小計	21,508,447
次年繰越金	7,466,330
合計	28,974,777

※サーキュラー印刷費は２刊分。１刊分の支払が来年度にずれ込んだ。

＜特別会計＞

摘　　要	金額(円)	備　　考
特別会計	6,000,000	一般会計より

(表2)

1997年度予算案

＜一般会計＞

収　　入

摘　　要	金額(円)
学会費	12,000,000
賛助会費	400,000
文部省学術誌刊行補助金	6,300,000
広告代	400,000
ＤＧＤページチャート	800,000
雑収入	20,000
利息	10,000
小計	19,930,000
次年繰越金	7,466,330
合計	27,396,330

支　　出

摘　　要	金額(円)
ＤＧＤ刊行費	7,200,000
ＤＧＤ編集費	2,000,000
学会事務センター業務委託費	2,000,000
発送費	2,000,000
諸経費	200,000
ＤＧＤ保管費	150,000
サーキュラー印刷費※	1,000,000
要旨集印刷費	900,000
大会援助費	400,000
運営委員会経費	300,000
事務局経費	300,000
国際発生生物学会へ	150,000
予備費	4,796,330
特別会計	6,000,000
合計	27,396,330

※サーキュラー印刷費は4刊分。昨年度の1刊分の支払が今年度にずれ込んだ。

＜特別会計＞

摘　　要	金額(円)	備　　考
特別会計	6,000,000	1996年より
特別会計	6,000,000	1997年一般会計より
合　　計	12,000,000	

・１９９９年度大会開催地について

会長が再来年度の大会開催を大阪市立大学の団まりな会員にお願いした。団まりな会員は大阪市立大学はじめ阪神地区の各大学や研究機関の会員にご協力いただくことを前提に開催を引き受けると回答した。

以上（記録、庶務幹事　松田良一）

第30回日本発生生物学会総会議事録

日時；平成９年５月28日　午後５時30分～６時30分
場所；筑波大学大学会館２階大会議場

１．議長選出（浅島誠幹事長）

会場から筑波大学の漆原秀子会員が推薦され満場一致で同会員を議長に選出した。

２．会長挨拶（岡田益吉会長）

本大会開催にあたり平林民雄大会実行委員長はじめ実行委員会と手伝って下さった学生諸氏に感謝する。分子で語る発生のストーリーが、この大会からより多く発信されることを祈る。ＩＳＤＢ、学術会議などとも連携して科学行政などにも学会として配慮していきたい。今後も会員の皆様から学会運営に関わるご意見をいただきたい。

３．大会準備委員会委員長挨拶（平林民雄委員長）

プログラムの印刷ミス、関連集会会場の狭さ、会費再請求等でご迷惑をおけしたが、その他は順調に大会が進行している。充実した大会になるように期待している。

４．報告事項

幹事長報告（浅島誠幹事長）

・昨年の本学会および運営委員の選挙は東中川徹会員はじめ選挙管理委員会のご尽力により無事修了した。その結果、岡田益吉会長の再選、運営委員の選出が行われた。
・本学会事務局は来年度（1998年１月）から東京都立大学の八杉貞雄先生のもとに移動する。
・会費の請求が一部、すでに納入済みの会員にも行われたことをお詫びする。
・本学会大会での発表資格は本年度会費の納入済みの会員であるので注意して欲しい。
・ブラックウェル社から別刷り代の請求が別刷り到着以前に来ることがあるが、支払いは別刷り到着後でかまわないことを同社に確認した。
・年間の研究助成公募等についてはサーキュラー86号に掲載した。

・来年の熊本大会で行われる「10年目の反省」についてのご意見を10月末日までにお寄せ下さい（サーキュラー86号参照）。
・再来年の大会は団まりな会員にお願いして、大阪地区で開催される予定である。

庶務報告（松田良一庶務幹事）

・会員数は５月23日現在　国内一般会員955名学生会員315名、賛助会員11、海外会員45名、合計1326名である。
・４年間以上会費未納の会員が７２名いたので、一部を除き除名させていただいた。したがって除名後の総会員数は昨年に比べ５％の伸びを示している。この伸び率は昨年と同程度である。
・会費未納が２年以上続くと自動的に退会者とみなすように事務センターに要請した。ただし、この時、未納者にはその旨、手紙を添えて連絡を行うこととした。
・サーキュラーは当初の計画通り、年３回の発行を行っている。
・メールアドレスとファックス番号を加えた会員名簿を発行した。一部、印刷ミス等があり、サーキュラー85、86号にその修正と新入会員の追加名簿を差し込んだ。ご迷惑をおかけしたことをお詫びする。
・大会での発表資格が会費納入者に限るにも関わらず、本大会の発表者においても会費未納者が87名、未入会者２２名もいることが判明している。昨年度の京都大会より事態は悪くなっている。このため事務量や連絡の手間や出費が大幅にふえ、学会の事務的運営に支障を来たしている。共同研究者、指導教官の方々は注意していただきたい。

ＤＧＤ編集報告（嶋田拓編集主幹）

・本年の１号（Vol.39, No. 1）の郵送に手違いがあり遅れたことをお詫びする。
・ＤＧＤの表紙を大幅に刷新したが、ご意見があれば是非、聞かせていただきたい。
・編集委員会をより効率よく内容のあるものにするためにエディター制を採り入れ、メンバー構成を変えた。
・今年の論文の採択　率は今のところ６６％程度である。
・現在のところ、最も遅い場合、受理から刊行までの期間が７ヶ月間近くになっている。そこでブラックウェル社と交渉し、本年４号と５号を増ページするなどして、４～５ヶ月以内になるように迅速な刊行を目指している。
・今後とも優れた論文をより多くご投稿いただくとともに、投稿された論文の査読作業等のご協力をいただきたい。

５．審議事項

・特別会計の新設について

特別会計の新設について浅島幹事長、福井会計幹事から提案があった。　審議の末、会員の研究や学会活動の活性化につながる事業をサポートする財源として使用するこ

とで特別会計の新設が承認された。その有効な使途の一つとしてカラーページ代の特別会計による一部負担が提案され議論の末、承認された。これにより、来年度の40巻からカラーページ代を最初のページを５万円、次ページ以降１ページあたり１万６千円になる予定である。

・1996年度決算

1996年度決算が福井会計幹事より報告された（表１参照)。引き続き、高橋三保子会計監査委員から予算の執行、書類の管理等は公正に行われていたとの会計監査報告があり、1996年度決算は審議の末、承認された。

・1997年度予算案

1997年度予算案が福井会計幹事より提出され（表２参照)、審議の末、承認された。

６．その他

会場からの発言なし。

７．来年度大会の開催について（安部慎一会員）

1998年５月28日（木）～５月30日（金）に熊本市産業文化会館にて行う予定である。懇親会も他の場所で行う予定。多くの会員の皆様の参加によりアクティブな大会になることを期待している。

以上　記録　松田良一（庶務幹事)

第17期　日本学術会議会員の選挙結果について（浅島誠幹事長）

平成９年７月18日付けで日本学術会議より、第17期日本学術会議会員選挙結果についてお知らせがありました。幸いに日本発生生物学会も推薦しました星元紀先生（東工大・生命理工）が当選（第４部門　生物科学専門動物科学研究連絡委員会）しましたので、お知らせします。

第30回日本発生生物学会大会雑記

北大・院理・生物科学　箕田　康一

サイエンスシティーつくばで開催された第30回大会は、口演・ポスター会場ともに極めて盛況であった。大変多くの参加者がいたにも関わらず、ストレスを全く感じることなく集中して講演に耳を傾けることができたのは、十分な広さと整った設備の会場それに何より大会のお世話をして下さった関係者の皆様のおかげだと思います。開催にあたりご尽力された大会事務局の皆様にこの場をおかりしてお礼申し上げます。

講演は分子生物学的手法を取り入れた研究が大半を占めており、まさに「発生現象を分子の言葉で説明するための土台が整ってきた」ことを示していたと思います。しかしながら内容的には似たものも多く、画一的であったように感じたのが少々残念です。良く言えばそれだけホットな課題を互いに競い合い、あるいは協力してその中からそれぞれ新たな知見を得ておりすばらしいことなのでしょうが、一連の講演を聴いていると何度も同じことが繰り返されており、堂々めぐりをしているようにさえ思えたのも事実です。また討論はテクニカルな指摘に終始するものが多く、現象の生理的意義や本質について研究者それぞれの考え方を戦わせることが少なくなってしまったように思います。以前は激しい討論の中から多くのサジェスチョンを受け、それが学会後の研究の刺激になっていたことを考えると、少し物足りなくさえ感じてしまいます。しかし確立した手法で手堅く研究が進められていることの表れで、発生生物学の発展に伴ったスタイルの変化のかも知れません。ただ、討論時間が3分では短すぎるのも事実で、これは発表形態を変えれば多少対応できるのではないかと思います。一連（同じ研究グループ）の講演は一人一人区切らずに続けて行い討論の時間を最後にまとめて取れば、今まで各演者が繰り返していた前置きが1回で済むためその分討論に時間を割け、しかも一連の研究全体を見渡した討論ができるのではないでしょうか。

学会参加感想記

熊本大学自然科学研究科　　矢沢　隆志

私は今回、初めて発生生物学会に参加させていただきました。以前から、うかがってはおりましたが、ポスター会場における人の多さとその熱気には、驚かされました。自分の発表においても、聞きに来て下さった同じような分野の研究をされている方々との激しいディスカッションのあまり、疲労困憊となり、その日はホテルに戻って寝るだけでした（もっとも、元気があっても筑波の場合、夜は寝るしかないような気もしますが……）。真

剣に研究に取り組む人たちの姿は、大変勉強になりました。ただ、レベルの低い発表は、ひどくたたかれるようなことを聞いておりましたので、内心ちょっとした不安と期待が交錯しておりましたが、そのようなことはなく、また、学会全体でもそういった傾向はなかったように感じました。

発表内容については、学会全体がオーガナイザーや形態形成といったものに偏りすぎているという印象を受けました。発生生物なのですから、これらが演題の中心になることはやむを得ないとしても、それをやっていない人間は会場に居づらいという雰囲気があるような気がします。口頭発表でもポスター発表でも、実験材料がショウジョウバエ・ゼブラフィシュ・チキン・マウスといったものではないというだけで発表を聴こうともせず、逆に、軸などという言葉がつくと、内容の善し悪しにかかわらず、人が飛びついていく。個人の興味の問題もあるので、一概に悪いとは言えないのですが、これでは、分野がちょっとはずれた発生学を研究している人間はやる気をなくし、学会に参加したくなくなると思います。私は日本産アカハライモリの精子形成におけるアポトーシスという、その辺の路線からまったくはずれているので、人一倍そのような空気に過剰に反応してしまうのかもしれません。しかしながら、生物学といいながら植物の方々の発表が少ないことが、学会の雰囲気を如実に物語っているのではないでしょうか？そこら辺は、日本発生生物学会というよりは、日本の発生生物学の風潮を表しているのかもしれません。このことは、日本における発生生物学の発展にとってマイナスのような気がいたします。ただ、逆に軸形成・形態形成というのは、発生生物の中で飛び抜けて発展している分野なのだということを痛感しました。

今回残念だったことは、諸雑誌で名前をよく見かける先生方がコールドスプリングハーバーに出かけていらしゃって、そのお顔すら拝見できなかったことです。次回は、我が熊本で開催されるわけですが、多岐にわたる分野から多数の方々が参加されて、すばらしい大会となることが期待されますし、また、そうなるものと信じております。安部次期大会委員長が総会でもおっしゃっていた通り会場は熊本の町中ですから、違った意味でも盛り上がった大会となることでしょう。どうぞ皆さん、熊本にいらっしゃって下さい。

Meetingにまつわるエトセトラ

大隅　典子（国立精神神経センター・神経研究所）

記念すべき日本発生生物学会の第30回大会は、筑波大学の主催で大学会館で行なわれました。例年通り３日間の日程でしたが、今回は若松義雄さん（現オレゴン大学）といっしょに前夜祭のようなワークショップを開催させていただいたので、自分にとってはさらに印象深い学会でした。大会前日にもかかわらず、多数の方が参加して下さったことに、こ

の場を借りて御礼申し上げます。また会場の準備などをして下さった筑波大学関係の方々にも心より感謝いたしております。特に途中のハプニングのために雨の中プロジェクターを取りに研究室へ走って下さった方、本当にどうもありがとうございました。翌日の阿形さん+古久保-徳永さんのワークショップもさらに大盛況で、さらに遅くまで盛り上がっていました。発生学会は他の学会よりも若い人が元気でたくさん参加されているなあ、というのが毎回出席する度に感じることです。他のどの学会よりもインフォーマルな雰囲気にあふれているのも、私はとても好ましく思います。これから学会の年齢が上がっていっても若い体質を保ち続けて欲しいと願っています。

さて、「大会後記」をと浅島先生からお願いを受けたのですが、ちょっと本題からははずれたことを書かせていただくことにします。今回の要旨集は初めてＡ４サイズとなっており、毎年演題数が伸び続けていることを感じさせられました（ただし１題あたり２分の１ページとなって実際に書く量は減ったので、それほどデータがなくてもとりあえず要旨を書けるようになったのは、発生学会の個性を無くすことにならないかと、個人的には少々危惧していますが)。ちょうど11年前にやはり筑波大学で開かれた第19回大会の要旨集を開くと、ほとんどが手書きでワープロを使っているものの方が少ないのですが、今年のものでは手書きは皆無であったことからも、私たちの生活がいかに電脳化されてきたかが伺われます。それは発表スタイルにも反映しており、口頭発表もポスター発表も、今やパソコン無しでは成り立ちません。特に若い世代の発表はソフトの性能を充分に活かしたものとなっているという印象を受けました。これらはメモリや処理速度が飛躍的に増大して大きな画像ファイルなどを扱うことが難しくなくなり、さらにスキャナやフィルムプロセッサ、ピクトログラフィーなどの周辺機器の値段も圧倒的に下がったことに起因すると思われます。実は日本の発生学会のあとゴードン会議に出席してから、西海岸のいくつかのラボを訪問してきましたが、高額機器の充実度はむしろ最近の日本のメジャーラボの方がはるかに凌いでいるように見受けられました。問題はここです。ラボにおける高額機器の充実度がサイエンスにおける生産性と比例するかというと、そうでもないことが多いのはなぜなのでしょう？　年度末の道路工事のように、日本でのお金の使われ方はどうも「フロー」ばかりで豊かな「ストック」を作っていく方向でないことが多いような気がします。あるいは表面的・物質的な豊かさと、内面的・精神的な豊かさの違いとでもいうべきでしょうか。サイエンスが貴族の趣味ではなくなった現代において、どのようにしたら日本なりの豊かなサイエンスを築くことになるのか、お金（とくに私たちの税金）の使い方を再検討すべきではないでしょうか。……ともあれ、暑い夏は渚へ行ってカニでも食べて、まず頭をリフレッシュさせるのがいちばんかな？

第13回国際発生生物学会参加記

東北大学大学院 理学研究科生物学教室　分子細胞生物学講座 発生生物学
田村　宏治

4年に1度の国際発生生物学会は、7月5日から10日の日程でアメリカはユタ州、ソルトレイク市郊外のスキーリゾートのひとつスノーバードで開かれた。標高2000mを越える高地での開催のため、時差ボケに加えて空気の薄さに坂道の上り下りがやけに苦しかった(歳のせいではないと信じている)。1000人を越える参加者と連日のタイトなスケジュール、そして熱のこもった議論の中に、世界の発生生物学の現状（最新のデータはでてこないだろうから、それでもたぶん半年以上は遅れた情報なのだとは思うが）を垣間見てきた。その印象が“はたして発生生物学はどこへ向かっていくのだろう。”であったなどと書くと、“何をしれた風な口をききやがる”とお叱りを受けるかもしれない。しかし、自分自身これから何を目指して行くべきか不安になっているところに、世界の現状がどうも自分の面白いと思う方向とは違ってきているように感じられると、この波について行くのか、それとも、あくまでも自分のやりたいことをやりたいように（ちまちま）続けていくのか、でもいったい自分は何が本当に面白いと思うというのか、などと自問自答を繰り返すことになり、そうこうするうちに大会期間は瞬く間に過ぎていった。

もう少し、具体的に話さないと何も伝わらないだろう。これから記すのは、あくまでも私の感じた印象であって必ずしも皆の感じたものではないとは思う（だからこそ、余計に不気味に感じられたりもする)。その点を考慮して（差し引いて）読んでいただきたいのだが、私の大好きな某先生が、”世の中シグナリングだよねえ”と反語的な意味を込めておっしゃっていたように、世界は分子間・遺伝子間の相互作用の解析とさまざまな発生系における分子・遺伝子の機能解析が非常にホットに繰り広げられている。それは、10年前に私がこの世界に足を踏み入れた頃には考えられなかったことで、この10年間の分子・遺伝子の発生過程における記載・解析の進歩はここに極まれり、といった感がある。ただし、次第にその進歩が発生学という学問から独立して走り出している様な気がしてならない。もう少し具体的な話にしよう。以下に示すのは多くみられた発表（ポスター）の内容である。

(1) ある遺伝子がある。その遺伝子はある動物のある系で重要な役割をもつことが知られた遺伝子である。そのような遺伝子は他の動物でも重要な役割をしているだろうから、別の動物でとってみたら、3つ4つ同じ様なものが取れた。それぞれの発現パターンを調べたら、ここあそこその場所でシグナルが見えたから、その場所で重要な役割をしているのだろう。実際、強制発現をするか発現抑制をかけると思い通りの形質に変わるから、やはりその場所の発生に重要な役割をしているのだ（そもそもこの“重要な役割”という

言葉自体が怪しい)。

(2) ある3つの分子がある。それらは別の系で相互に誘導したり抑制したり、相互関係をもつことが分かっている。しかも、そのネットワークがその発生系で重要な役割をもつとされている。それと同じ遺伝子あるいは相同な遺伝子が、別の動物の別の場所でやはり発現していた。さらに、そのうちの1つを強制発現させたり抑制したりすると、他の2つがきれいに発現を変えるので、同じ様な相互関係がこの場所でも起こっている。したがって、そのような相互作用がこの系でも重要な役割を担っているのだろう。

(3) ある分子がある。その分子は分泌性のタンパクである。その分子自体、発生過程で興味深い機能があることが分かっている。で、その作用にはリセプターが重要な役割をもつはずだから、その遺伝子をクローニングした。実際に、両者が結合することも分かった。そのリセプターには、リン酸化が深く関わる様なので、そのkinaseをとった。そのリン酸化には……

"それがどうした。素晴らしいじゃないか。"と思われる方は、私とは論点がかみ合わないだろうからこれ以上読み進まれない方がよいかもしれない。私自身、上のような内容を否定する気は更々ないが、どうも分子や遺伝子が先に来ていて現象や実験系があとからついてきているように感じられて仕方がないのである。しばらく前までは、"この現象をみていたら、現象の内容から考えてこの分子が面白そうだったので、それをやってみたらこの辺まではあたりでした。でも、これ以上はこの分子では分かりそうもありません。"という話が多かった。たとえ逆の入り方(先に分子ありき)をしていても、たとえはったりでもそう言う人が多かった。しかし、今は違う。接頭語が、"ある現象"ではなく"ある分子"になっているのである。まるで、分子生物学をembryoという試験管の中で繰り広げているようである。例えば誘導という現象を考えても、本来、発生学の面白味というのは、誘導物質の詳細な内容ではなく、誘導物質の作用のプロセスにあるのではないだろうか。もちろん、なにが誘導物質かという問題は、非常に大切である。それは、何が誘導分子かが分かると、次にどの様なプロセスが起こるかを新たに想像することができるようになり、誘導という現象をまたひとつ理解できると信じられるからである。しかし、その分子のシグナル伝達の詳細が誘導という現象のプロセスの理解に新たな想像をかき立てるとは思いにくい。あるひとつの分子が動けば、その周りのシグナル系がひとまとまりになって動くのはごく当たり前(?)のことであって、発生現象のプロセスとしては、そのひとまとまりの動きの次になにが来るのか、実際となりの細胞はどう動くのか、それが面白いのではなかったのだろうか。

そんなことは当たり前だ、と私を叱ってくださる人が多いことを信じたい。単に、かゆいところに手が届きにくいだけで、皆、同じことを考えているのだと。実際、いくつかの遺伝子を単離してきた私自身がそのようなもどかしさの中にいるのと同じように、皆、次へのステップとして分子の記載をしているのだと。しかし、あまりにも波が高くて次のス

テップへ行く前に飲み込まれてしまいそうな気がする。少なくとも、この状態の中に入ってきた若い人たちが、次のステップ、すなわち、分子を使って新しい発生現象をみつけたり分子を知ることによってそのプロセスをより正しく（詳細にではない）把握する、といった将来を考えられるのだろうか。そんなことを考えると、このような異端な感想を書く奴が一人くらいいてもいいかと、自分を慰めてみたりする。

実際には、上のような話が全てではなかった。興味深い話もいくつもあった。ただ、全体の印象としては”世界がこうなんだから、日本の発生生物学会がああでも仕方がないのだろうな”というのが正直なところである。日本の発生生物学会の感想は私の記すべきことではないので書かないが、昨年の感想記（瀧口ー林恵子さんのもの、No.84, pp18, 1996）に私も同感である。さてこれからどうなっていくのだろうか。幸か不幸か私自身、1年半ほどの間アメリカのこの波のまっただ中に飛び込むことになりそうなので、はたして何が起こるか、自分がどう変わっていくのか、そして発生学がどう変わっていくのか、楽しみにしているところである。

国際発生生物学会に参加して

東京都立大学大学院理学研究科生物学専攻（発生プログラム研究室）
八杉　貞雄

第13回国際発生生物学会（ISDB）が7月5日から9日まで、アメリカ・ユタ州スノーバードで開催された。スノーバードはスキー場として有名なところであることは承知していたが、日本人スキーヤーにとっては垂涎の的であることを帰国してから知った。2002年には冬季オリンピックの会場にもなるとのことである。会議はこの小さい村（？）にあるいくつかのロッジを宿泊施設とし、メインの会場もロッジの会議場を使用して行われた。昼は強い日差しに思わずたじろいだが、夜になると半袖では震えるほど寒く、満天の星に感動した。

学会は北アメリカを中心とする発生生物学会（SDB）との共催で、5日の夜のオープニングはWieschaus, Nusslein-Volhard, Lewisという3人のノーベル賞受賞者のそろい踏みに多くの聴衆が詰めかけた。翌日からの実質的な会議では、午前中は6人の学者によるPlenary Lecturesが行われ、午後はポスター発表に続いて3会場でシンポジウムが平行して行われた。また今回の学会で、ISDBからはN. M. Le Douarin、SDBからはE. Hayという2人の女性研究者がそれぞれHarrison賞、Conklin賞を受賞した。このことはこの分野での女性の活躍を象徴するもので、実際、シンポジストの半数近くは女性であった。

筆者はこれまで、なんの因果か、何回もこのような学会について見聞録を書くことを求

められている（単に頼まれると断れないのだという声有り）。前々回のユトレヒトの学会（1989）の時にもインフォメーション・サーキュラーに見聞録を書いている。その記事をみると、発生を遺伝子の言葉で語ることの怒涛のような勢いに筆者が戸惑い、またそれに追いついて行かれるのかというあせりにも似た気持ちがにじんでいる。一方でそのような潮流に対する危惧の念もあって、果たして遺伝子の研究だけで発生が理解できるのだろうかと疑問を投げかけたりもしている。

しかし今回の学会では、今やそのような疑問や躊躇はほとんど無意味といっていいほど、あらゆる現象が遺伝子の発現に基づいて理解されていた。問題は、単にある現象に関与する遺伝子を単離同定するだけでなく、各遺伝子間の相互作用、いわば遺伝子の活動の間に張りめぐらされた網状構造を明らかにすることであるといえるであろう。私の頭には、いい加減な英語であるが、intergenic webという単語がひらめいた。クモの巣に張り巡らされた糸のごとくに遺伝子やそこにコードされる物質が互いに関係を持ち、巣の一端に加えられたわずかな力が巣の全体を震わせ、中央にいるクモの反応を惹起する、という比喩である。細胞にあるいは組織に与えられた刺激がいかなるsignaling pathwayを通って反応を引き起こすかを調べるには、クモの巣の糸を丹念に辿らなければならない。また、ある巣に張られているのと同じ糸が実は別の巣にも利用されていることが思いがけずに明らかになることもある。そのことを象徴的に示したのは、神経のガイダンスに関与するsemapholin IIIのリセプターが、我が国で藤沢肇さんが長らく研究しておられたneuropilinであることが示された（Tessier-Lavigne）ことである。このほかにも、神経のガイダンスについては、多くの新しい知見が得られていることも付記しておこう。

遺伝子の相互作用や役割の重なりはまた、シンポジウムの演題の内容にも現れていた。それぞれのシンポジウムには当然それぞれのテーマがあるが、しかし実は、多くのシンポジウムにおいて（すなわち異なる発生現象において）同じ遺伝子のカスケードが扱われていたということである。sonic hedgehog, BMP, wntなどの遺伝子や遺伝子群が、種々のテーマに繰り返し登場したのは、これらの遺伝子のマルチな働きをよく示していた。

従って、今後の発生生物学の動向の一つは、それぞれの現象の中での多くの遺伝子の相互作用やカスケードを明らかにすることと共に、異なる発生現象の中でそれぞれの遺伝子がどのような位置を占めているか、いわば遺伝子の働きの相同性と相似性を明らかにしていくことであろうかと、感じた次第である。

相同と相似といえば、遺伝子の働きの系統発生学的な研究の多さもまた今回の会議の特徴の一つであった。特に原索動物を材料とした研究は、今後、脊椎動物の進化との関係で重要な情報を提供するであろう。ある遺伝子について種々の動物で（あるいは植物で）その特徴を調べるだけでは、かつての枚挙生物学とあまり変わるところがないかもしれない。要は、その遺伝子を研究するにあたって、当該動植物群間の真の意味での類縁や、器官の相同性、個体発生に及ぼす系統発生上の制約、それらのことが念頭にあって初めて遺伝子

の研究が生きてくる、と感じるのはあまりにも偏った見方だろうか。

かつて日本の発生生物学会の見聞録を書いた機会（1988）に、形態学の復権に関する私見を述べさせていただいたことがあった。発生過程をできるだけ素過程に分解して生理学的に、また分子生物学的に解明する一方で、形態の形成を総合的な現象として捉え、理解する努力また必要であろう、という主旨であった。発生生物学はいうまでもなく、個体の構築のすべての側面を明らかにすることを目標にしているわけであり、その中には当然我々の体のもつ精妙にして合目的的な形態の秘密の解明も含まれるべきであることは言をまたない。今回の会議では、しかし、筆者の見る限り、そのような認識はむしろ希薄であった。筆者のように常に形態と機能を合わせて考えるべく教育されてきたものとって、このような傾向はいささか残念なのであるが、これもまた現今の潮流からすれば、むしろ少数意見にすぎないであろう。

少し抽象的に過ぎることを書いてしまった。個々の発表や講演についても触れるべきであるかもしれないが、もはや紙面にその余裕がないように思われる。ただ、今回の会議では日本の、それも若い方が優れた講演をなさったことを報告しておくにとどめる。

最後に自分の研究と関連づけての感想を一つ。我々はずっと消化器官の形成における遺伝子プログラムの展開について研究しているわけであるが、未だにこの分野は研究者数が少ない。それだけに我々の研究が独自性をもちうるということにもなるのであるが、やはり議論しあえる「仲間」が多くいないことは、いささか寂しいことであった。せっかく興味深い遺伝子のノックアウトマウスがいても、消化器官でのフェノタイプは観察されていないことが多い。自分でそのようなマウスを作成もしないでこのようなことをいうのは気が引けるが、実にもったいないと思うこともしばしばである。日本からの参加者（約８５名）は圧倒的に若い方が多かった。私などは、自分では若いつもりでも、今回の日本からの参加者の中では５指（もしかすると３指）に入る「高齢者」であった。若い方の感性の中に世界的な研究者のものの見方が取り入れられ、世界でも通用する優れた研究感覚が養われるのには大変に良い機会であった。このような点からも、この会議が我が国の発生生物学の興隆にも資するところが大であることを確信している。

第47回　科学講演会のご案内

財団法人　東レ科学振興会

と　き：平成９年９月30日（火）　開演　18時00分　　終演20時45分

ところ：有楽町朝日ホール（有楽町マリオン11階）
東京都千代田区有楽町２－５－１（ＪＲ有楽町駅前）

テーマ：**“光でどこまで、光はどこまで”**

Ⅰ．集まる光、広がる光　　ー発展する光エレクトロニクスー
東京工業大学精密工学研究所長・教授　伊賀健一

Ⅱ．光で見えないものを光で見る、あやつる、加工する
東京工業大学総合理工学研究科・教授　大津元一

その他：入場無料、定員638名（当日会場先着順・会場17時30分）
☆予約の必要はありません。
☆ご来聴の方には、後日講演記録を進呈いたします。

主　催：東レ科学振興会　　**後　援**：朝日新聞社・応用物理学会・電子情報通信学会

1960年に“レーザ”という光の発振器が登場して以来、27年になります。最初は、レーザから発する強い光ビームは殺人光線などと言われたこともありますが、幸い軍事応用などに用いられることもあまりなく、光エレクトロニクスという大きな科学技術、産業分野を生み出してきました。光ファイバ通信ネットワークは今や地球を網の目のように覆い、光ディスクは音楽用、コンピュータ用に普及して、身近なものになってきています。

マルチメディア時代の到来とよくいわれますが、通信網、記録・メモリ、表示など、どれを取っても光エレクトロニクスがその先端を切り開き、コンピュータとともにその基盤を支えているのです。さらに、新しい波長領域のレーザ、波長以下のミクロの世界に迫る新技術など、新しい展開に向けて多くの芽が出始めています。

今回は、これら光エレクトロニクスに関する最先端の話題、興味ある新技術などについて、斯界を代表するお二人の先生からお話しいただくことにいたしました。

第14回（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団公開シンポジウム

『ゲノム医学の新しい展開ー難病・がん・成人病への挑戦』

日　時：平成９年10月18日（土）　12時50分～18時

会　場：経団連会館ホール（東京都千代田区大手町）

主　催：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後　援：科学技術庁、厚生省

オーガナイザー：榊　　佳之（東京大学　医科学研究所　教授）

中村　祐輔（東京大学　医科学研究所　教授）

演　題：

はじめに：　榊　　佳之（東京大学　医科学研究所　教授）　13：00

１．神経難病のゲノム解析

①「福山型筋ジストロフィー」　13：20

戸田　達史（東京大学　医科学研究所　助教授）

②「トリプレットリピート病」　13：55

辻　　省次（新潟大学　脳研究所　教授）

２．がんとの闘い

③「ＦＩＳＨ法によるがんの診断とゲノム異常解析」　14：30

稲澤譲治（東京大学　医科学研究所　助教授）

④「ノックアウトマウスを用いたヒト発癌機構解明の試み」　15：30

野田　哲生（(財）癌研究会癌研究所　部長）

３．多因子病に迫る

⑤「多因子病のゲノムー理論と実際」　16：05

三木　哲郎（大阪大学　医学部　助教授）

⑥「The Human Genome and Common Diseases」　16：40

Mark Lathrop（Oxford University 教授）

４．総合討論　17：30

榊　　佳之（東京大学　医科学研究所　教授）

中村　祐輔（東京大学　医科学研究所　教授）

参加方法：参加費無料。住所・氏名・所属・電話番号を明記し、下記宛に葉書またはＦＡＸにてお申し込み下さい。参加証をお送りします。但し定員（420名）になり次第締め切ります。

申込締切：10月８日（水）

申 込 先：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194　東京都町田市旭町３－６－６

ＴＥＬ0427－25－2576　　ＦＡＸ0427－22－8614

第１３回ＷＡＫＯワークショップ

脳神経系の発生・分化とその病態
－生理機能と病態像の解明へ向けて－

日時：平成９年１１月５日（水）１０：００～１８：００
場所：全電通ホール（東京都千代田区神田　お茶の水駅　徒歩５分）
申込先：和光純薬工業（株）試薬学術部
Tel: 03-3270-8123
Fax: 03-3242-6501

１０：０５～１０：１５　はじめに
東大・医科研　御子柴克彦

座長　浅島　誠

１０：１５～１０：５５　シューペマン・オーガナイザーから神経形成へ
東大・総合　浅島　誠

１０：５５～１１：３５　神経発生過程における細胞運命決定機構
阪大・医　岡野栄之

１１：３５～１２：１５　嗅覚神経系の機能マップと細胞接着分子
理化学研究所・フロンティア研究システム　森　憲作

１２：１５～１３：３０　昼食

座長　御子柴克彦

１３：３０～１４：１０　中枢神経系のアイデンティティの形成機構
東北大・加齢研　仲村春和

１４：１０～１４：５０　神経回路形成と軸索の誘因・反発
阪大・基礎工学研究科　村上富士夫

１４：５０～１５：３０　神経分化と形態形成と高次機能
東大・医科研　御子柴克彦

１５：３０～１６：００　休息

座長　鍋島陽一

１６：００～１６：４０　個体老化の分子機構
国立精神神経センター・神経研究所　鍋島陽一

１６：４０～１７：２０　アルツハイマー病における神経細胞死
東大・医学系研究科・神経病理　井原康夫

１７：２０～１８：００　神経細胞の死に方
東大・医学系研究科・神経内科　金澤一郎

くまもと　医学・生物科学シンポジウム

脊椎動物のボディプラン
Molecular Bases of the Vertebrate Body Plan

organized by Shinichi Aizawa and Peter Gruss

と　き：平成９年11月５日（水）　９時00分～19時00分

ところ：ＫＫＲホテル熊本（千葉城町）

Shinichi Aizawa
Kumamoto University

Eddy M. De Robertis
University of California, Los Angeles

Scott Fraser
California Institute of Technology

Peter Gruss
Max-Planck Institute, Gottingen

Robb Krumlauf
MRC National Institute for Medical Research

Atsushi Kuroiwa
Nagoya University

Nicole Le Douarin
CNRS College de Frace

Andrew Lumsden
Guy's Hospital Medical School

Christiane Nusslein-Volhard
Max-Planck Institute, Tubingen

John L. R. Rubenstein
Unibersity of California, San Francisco

Antonio Simeone
CNR

Wolfgang Wurst
GSF-Forschungzentrum

事務局：熊本大学医学部形態発生　石原　麻紀子
E-mail:morpho1@kaiju.medic.kumamoto-u.ap.jp
ＴＥＬ（096）373－5322
ＦＡＸ（096）366－4287

サーキュラー前号でお知らせした下記の国際シンポジウムのより詳しい内容をお知らせします。

第4回インターナショナル京都ライフサイエンスシンポジウム
「発生—高次多細胞体制の構築」

講演予定者：

Richard Axel (Columbia Univ), Cori Bargmann (Univ California, San Francisco),John G. Flanagan (Harvard Univ), Corey S. Goodman (Univ California, Berkeley),Yuh Nung Jan (Univ California, San Francisco) , Andy McMahon (Harvard Univ), Christiane Nusslein-Volhart (Max Planck Institut), Norbert Perrimon(Harvard Univ), Susumu Tonegawa (MIT), 影山龍一郎（京都大），濱田博司（大阪大），廣川信隆（東京大），堀田凱樹（東京大），西田栄介（京都大），野田昌晴（基生研），佐藤矩行（京都大），月田承一郎（京都大），竹市雅俊 (京都大)

主　　催：京都大学,
　　文部省新プログラム方式による研究「発生・形態形成の個体レベルにおける分子生物学的研究」班

協　　賛：塩野義製薬株式会社

開催日時：1997年11月6日（木）9：00～17：00
　　（講演終了後、Get together partyを行います。奮ってご参加ください。）
　　11月7日（金）9：00～17：00

会　　場：国立京都国際会館　ルームB1（1階）
　　〒606　京都市左京区宝ケ池　TEL 075-705-1234
　　会場までのアクセス—地下鉄　国際会館前駅下車（京都駅から20分）

参 加 費：無料

開催責任者：利根川　進, 竹市　雅俊

参加方法：参加ご希望の方は、次のいずれかの方法で申込んで下さい。

1）ホームページを8月末までに開設し、参加申込を受け付ける予定です。
http://www.congre.co.jp/IKLSS/

2）9月にサーキュラーとともに申込書を配付しますが、お手元に届かない場合、またはホームページにアクセスできない場合は下記事務局あてにファックスでご請求下さい。

インターナショナル京都ライフサイエンスシンポジウム事務局
〒606　京都市左京区吉田河原町14　（株）コングレ京都支店内
FAX 075-762-2304 TEL 075-752-0888

申込をもって受付にかえさせていただきますので、特にご通知をいたしません。当日直接会場へお越しください。シンポジウムのアブストラクトは当日配布します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上記の国際会議と連動して、その前日に以下の講演会を開催します。これにも奮ってご参加下さい。(申込は必要ありません。自由に参加して下さい。)

公開講演会「分化・形態形成シグナルとそのネットワーク」

場　　所：京大会館（京都市左京区吉田河原町15-9　電話 075-751-8311地下鉄丸太町駅からタクシー10分)

日　　時：1997年11月５日（水）10：30～17：00

近藤　寿人　　水晶体分化の条件：Pax6とSox2
安田　國雄　　眼形成の分子機構
岡本　　仁　　中脳・小脳形成における組織間相互作用
松居　靖久　　マウス初期発生過程における生殖系列の決定機構
竹内　　隆　　胚の形態形成における jumonji 遺伝子の機能
高田　慎治　　マウスの胚葉および神経冠形成におけるWntシグナルの役割
能瀬　聡直　　ショウジョウバエを用いた神経回路形成機構の解析
上村　　匡　　神経回路の構築を制御するカドヘリンスーパーファミリー
岡野　栄之　　神経発生過程における側方抑制性シグナル

主催／連絡先
文部省新プログラム方式による研究
「発生・形態形成の個体レベルにおける分子生物学的研究」班
(研究リーダー：竹市雅俊　京都大学大学院理学研究科生物科学専攻
電話 075-753-4196, Fax 075-753-4197)

第１２回「大学と科学」公開シンポジウム

植物の生長

―遺伝子から何が見えるか―

平成９年１１月１５日（土）、１６日（日）

東京有楽町・朝日ホール

入場無料

１１月１５日（土）

A．主催者挨拶 (9:50 - 10:00)　第１２回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 文部省

B．栄養の貯蔵 (10:00 - 12:10)　〈司会〉京都大学大学院農学研究科 大山莞爾

いもがふくらむとき―糖による遺伝子活性化― ---------- 名古屋大学大学院生命農学研究科・岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所 中村研三

種子ができるとき―変身する液胞― ---------- 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所 西村いくこ

生き残るための種子のくふう ---------- 北海道大学農学部 内藤　哲

質疑討論

― 昼 休 み (12:10 - 13:20) ―

C．環境との戦い (13:20 - 15:40)　〈司会〉京都大学大学院理学研究科 町田泰則

病気から身を守るしくみ ---------- 奈良先端科学技術大学院大学 島本　功

乾燥への応答と耐性のしくみ ---------- 理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター 篠崎一雄

●特別講演：低温と塩害に強い植物を作る ---------- 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所 村田紀夫

質疑討論

― 休 憩 (15:40 - 15:50) ―

D．細胞の形と植物の生長 (15:50 - 16:50)　〈司会〉東京大学理学部附属植物園 福田裕穂

●特別講演：茎はなぜ細長いか ---------- 大阪大学名誉教授 柴岡弘郎

質疑討論

１１月１６日（日）

E．花と受精 (10:00 - 12:20)　〈司会〉京都大学大学院理学研究科 岡田清孝

花の形を決める遺伝子 ---------- 京都大学化学研究所 後藤弘爾

花の絞り模様の決まり方 ---------- 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所 飯田　滋

●特別講演：受粉と自・他の認識 ---------- 東北大学名誉教授・採種実用技術研究所 日向康吉

質疑討論

― 昼 休 み (12:20 - 13:30) ―

F．葉の形づくり (13:30 - 15:00)　〈司会〉奈良先端科学技術大学院大学 島本　功

葉の形と光合成 ---------- 名古屋大学生物分子応答研究センター 松岡　信

葉の形づくりに関わる遺伝子 ---------- 京都大学大学院理学研究科 町田泰則

質疑討論

― 休 憩 (15:00 - 15:10) ―

G．根と維管束の形づくり (15:10 - 16:40)〈司会〉名古屋大学大学院生命農学研究科・岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所 中村研三

維管束はどのように作られるか ---------- 東京大学理学部附属植物園 福田裕穂

根の形と生長を司るシステム ---------- 京都大学大学院理学研究科 岡田清孝

質疑討論

3rd International Larval Biology Meeting

January 13-19, 1998

The larval biology meetings were established in 1993 as a biennial forum for work on the ecology and evolutionary biology of larval stages of aquatic organisms. The meetings are relatively informal, consist of mini-symposia and reports on current research, and the aim is to cover a wide taxonomic range.

The next meeting will be held at the University of Melbourne, Victoria, in southeastern Australia. The initial organizing committee is Mick Keough (Univ. Melbourne), Maria Byrne (University of Sydney), Jon Havenhand (Flinders University of South Australia), and Greg Jenkins (Marine and Freshwater Research Institute, Victoria).

Information about the conference is on the web at:

http://rubens.its.unimelb.edu.au/zoology/larval/

Call for Mini-symposium proposals As with previous meetings, there will be a series of half-day symposia, organized by participants in the meeting. We are calling for proposals from people willing to arrange a half-day session (including contacting speakers). You should include the general topic, and a list of likely speakers in your proposal, which should be sent to Maria Byrne by email (byrne@anatomy.su.oz.au) or snail mail, by the 30th of May, 1997. The list of symposia will be sent out with the second mailing/call for abstracts.

To get started, initial suggestions include:

Larval nutrition (coordinated by Maria Byrne) Behaviour of dispersing larvae and its role in mesoscale dispersal (Greg Jenkins/MAFRI & Jeff Leis/Australian Museum)

Timelines

April 1997 - First mailing and call for symposium proposals

30 May 1997 - Deadline for symposium proposals

1 July 1997 - Second mailing: Call for abstracts & list of symposium topics

15 October 1997 - Deadline for receipt of abstracts & early registration

Jan 13 1998 - Meeting starts!!

Mailing list

The web site will be the source of most conference information, and administration. We will use our mailing list to notify you of program details, calls for symposium proposals, etc. When there is

a major change to the web sites, an announcement will be broadcast to everyone on the mailing list. If you or a colleague wish to be added to the mailing list, please complete the response form on the web site. Everyone who received this announcement by direct email is already there on the list.

Personal Attention:

General enquiries about the meeting can be sent to larval@zoology.unimelb.edu.au., or by snail mail to Larval Meetings, Dept of Zoology, Parkville, VIC 3052, AUSTRALIA.

Mick Keough
Department of Zoology
University of Melbourne, Parkville VIC 3052, AUSTRALIA
Ph. +61 3 9344 5130 Fax. +61 3 9344 7909
Email: keough@zoology.unimelb.edu.au

第3回アジア太平洋細胞生物学会議

1．会議の名称

和文名　　第３回アジア太平洋細胞生物学会議
英文名　　Third Congress of the Asian-Pacific Organization for Cell Biology
英文略称　　3rd APOCB Congress

2．主催

日本学術会議（Science Council of Japan : SCJ）
日本細胞生物学会（The Japan Society for Cell Biology : JSCB）

3．開催時期

1998年８月24日（月）～28日（金）（５日間）

4．開催場所

千里ライフサイエンスセンター（豊中市新千里東町１－４－２）
よみうり文化ホール（豊中市新千里東町１－１－３）

5．会議の性格と目的

この会議は、アジア太平洋細胞生物学機構（Asian-Pacific Organization for Cell

Biology;APOCB）が4年ごとに開催する国際会議であり、細胞生物学に関する研究を発展させるため研究発表と討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的とするものである。

なお、アジア太平洋細胞生物学機構は、細胞生物学の国際的な発展を目的とする国際学術団体であり、日本細胞生物学会も加入している。

また、日本細胞生物学会は、日本学術会議第4部細胞生物学研究連絡委員会が密接な連携を保っている。

なお、毎年開催されている日本細胞生物学会大会は、1998（平成10）年に限り、この会議とジョイントによる開催となる。

(2) 主要題目：

Main Theme: "Form Molecules to Man:Frontiers in Cell Biology"

Scientific Program (Tentative)

1. Cell Nucleus and Gene Expression
2. Cell Cycle, Cell Proliferation and Apoptosis
3. Cell Division:Mitosis and Meiosis
4. Structure and Function of Cell Organelles
5. Targeting Signals
6. Protein Synthesis and Molecular Chaperones
7. Structural Analysis of Macromolecules
8. Cytoskeleton and Cell Matrix
9. Membrane Traffic
10. Cytokines, Receptors and Signal Transduction
11. Cell Adhesion and Extracellular Matrix
12. Development and Cell Differentiation
13. Biology of Immune Cells:Interaction and Regulation
14. Cellular and Debelopmental Neurobiology
15. Molecular and Cellular Biology of Diseases
16. Viruses
17. Plant Cell Biology
18. New Techniques and Tactics in Cell Biology
19. Teaching and Training in Cell Biology
20. Specialized Cell Function

Symposium Titles (Tentative)

1. Molecular Dynamics of Cytoskeleton in Cell Motility and Structure
2. Molecular Mechanisms of Cell Cycle Comtrol
3. Cell-Cell and Cell-Extracellular Matrix Adhesion in Cellular Recognition and Signaling
4. Molecular Chaperones and Protein Transport
5. Chromosome Dynamics
6. Frontiers of Structural Biology
7. Apoptosis
8. Rho Small G Protein and Actin Cytoskeleton
9. Cytokine-Mediated Regulation of Cell Growth and Differentiation
10. Cell Polarity and Cellular Signaling
11. Genomic Instability
12. Cell Differentiation and Morphogenesis during Early Animal Development
13. Mechanism of Cytoplasmic Division
14. Ran Network and Nuclear Transport
15. New Frontiers of Molecular and Cellular Biology in Plants
16. Developmental Biology of Nervous System

公益信託・團生物科学国際基金
平成10年度助成先公募について

1．助成の対象

生物科学（発生生物学、細胞生物学、分子生物学等）の研究にたずさわっている若手研究者を対象とし、申請時に原則として37歳以下とし、国籍は問わない。

また、諸外国からの若手研究者の募集、招聘などを含む。

2．研究助成金

平成10年４月～平成11年３月出発のものを対象とする。

総額約400万円。

①長期（３か月程度）の国際共同研究のための旅費と滞在費（１名当り90万円以下）。

②短期（１か月程度）の国際共同研究のための旅費と滞在費（１名当り50万円以下）。

③国際研究集会参加のための旅費と滞在費（１名当り50万円以下）。

3．応募方法

所定の用紙ならびに募集要項の詳細は当公益信託事務局にハガキで請求のこと。

（注：長期、短期、国際研究集会の区別を必ず明記のこと）。

4．申込締切日

平成９年10月31日（必着）。

5．選考の方法

当公益信託運営委員会において選考する。

6．採否の通知

平成９年12月に採否を通知する。

7．事務局

〒103　東京都中央区日本橋３－１－８

日本信託銀行株式会社

本店営業第四部営業第一グループ

公益信託　園生物科学国際基金

担当：遠藤雅範

ＴＥＬ03－3245－8140

ＦＡＸ03－3271－2843

なお平成９年度助成金が下記の通り決定しました。

氏　名	所属	受入研究先／国際会議開催地
（長期国際共同研究）		
高　坤山	中国	京都大学
Jonathan Nok Andrew	ナイジェリア	長崎大学
大迫　隆史	日本	University of Zurich
（短期国際共同研究）		
服田　昌之	日本	University of Munich
村田　隆	日本	University of Colorado
Randy Yat Choi Poon	英国	金沢大学
（国際研究集会参加）		
江面　浩	日本	1st International ISHS Symposium on Cucurbits
K.Murugan	インド	13th International Congress of Comparative Endocrinology

1998年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び　研究助成候補者の推薦依頼について

1997年６月　女性科学者に明るい未来をの会
会長　湯浅　　明

「女性科学者に明るい未来をの会」（1980年創立）は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞（猿橋賞）を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託（1990年３月13日文部省認可）「女性自然科学者研究支援基金」（受託者　東洋信託銀行株式会社）から支出されます。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿　橋　賞

1　本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50才未満）に贈呈します。
2　本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
3　本賞の贈呈は１年１件（１名）です。
4　所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務所までにお送り下さい。
5　締切は1997年11月30日（必着）。
6　第18会の賞贈呈式は、1998年５月、東京において行なう予定です。

なお、最近３年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第15回（1995）	東京工学大学理学部助教授 「代数幾何学における特異点の研究」	石井志保子　博士
第16回（1996）	理化学研究所主任研究員 「固体表面における化学反応の基礎研究」	川合　真紀　博士
第17回（1997）	名古屋大学生物分子応答研究センター助教授 「植物耐塩性の分子機構に関する研究」	白井　浩子　博士

研　究　助　成

1　海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。

2　助成金は１件10万円とし、年に数件とします。

3　所定の用紙に推薦対象者（各締切日において　満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。

4　締切は1997年11月末日と、1998年４月末日の２回。

女性科学者に明るい未来をの会
166　東京都杉並区高円寺4－29－2－217
電話　03－3330－2455（ＦＡＸ　兼用）

＜東京工業大学生命理工学部
生体機構学科発生生物学講座助教授の公募＞

東京工業大学生命理工学部では、生体機構学科発生生物学講座の助教授１名を下記の要領で公募します。

１．研究分野

発生生物学および細胞生物学と、それらの関連分野。細胞複製あるいは細胞周期制御の発生にともなう調節機構についての研究に、意欲的に加わっていただくことを希望します。できれば、アフリカツメガエル卵を用いた実験系を活用できることが望ましい。

２．発生生物学講座の構成

教　授　　岸本健雄
助教授　　(本公募)
助　手　　大隅圭太、立花和則

3．公募締切日

平成９年８月25日（月）

4．提出書類

(1) 履歴書

(2) 業績目録

(3) 主要別刷５編（できれば、研究内容がわかるような総説を含む）

(4) これまでの研究の概要および今後の抱負（Ａ４版で１枚程度）

(5) 応募者について照会できる方の氏名・職名（２名）

5．応募書類の送付先

〒226　横浜市緑区長津田町4259

東京工業大学総合理工学研究科等事務部　庶務課長

（生命理工学部生体機構学科発生生物学講座教官公募書類在中と朱書して、書留で送付のこと）

6．問合せ先

東京工業大学生命理工学部生体機構学科

発生生物学講座教授　岸本健雄

（Tel: 045-924-5723; e-mail: tkishimo@bio.titech.ac.jp）

＜会員資格変更＞

学生→正会員

喜納　宏昭	東京大学医科学研究所がん細胞研究部	〒108　港区白金台4－6－1
山崎　　剣	早稲田大学教育学部生物学教室	〒169－50　新宿区西早稲田1－6－1
牧田　亨介	高知医科大学第二生理学教室	〒783　南国市岡豊町小蓮
田中　　良		〒532　大阪市淀川区十八条1－3－21
坪川　達也	慶應義塾大学生物学教室	〒223　横浜市港北区日吉4－1－1
宮　　隆史	東京工業大学生命理工学部生命理学科	〒226　横浜市緑区長津田町4259

国内→海外

古野　伸明	Wellcome/CRC Inst.	c/o Dr.Jonathon Pines, Tennis Court Rd.,Cambridge, CB2 1QR, U.K.

＜入会＞

有賀　千浪	田辺製薬㈱安全性研究所	〒532　大阪市淀川区加島3－16－89
松岡瑠美子	東京女子医科大学循環器小児科	〒162　新宿区河田町8－1
石川　智夫	萬有製薬つくば研究所生物医学研究所第四研究室	〒300－33　つくば市大久保3
木村　純子	東京都神経科学総合研究所	〒183　府中市武蔵野台2－6
木村　芳滋	熊本大学医学部神経分化	〒862　熊本市九品寺4－24－1
高橋　俊雄	国立遺伝学研究所固体遺伝研究系発生遺伝部門	〒411　三島市谷田1111
前田ミネ子	大阪大学大学院理学研究科	〒560　豊中市待兼山町1－16
三宝　　誠	岡崎生理学研究所	〒444　岡崎市明大寺町字西郷中38
柳沢　尚武	東京大学農学生命科学研究科応用遺伝	〒113　文京区弥生1－1－1
柴田由美子	甲南大学理学部生命学科	〒658　神戸市東灘区岡本8－9－1
榎木　英介	東京大学大学院総合文化研究科 生命環境系浅島研究室	〒153　目黒区駒場3－8－1
町田　修一	東京女子医科大学日本心臓血圧研究所 循環器小児科	〒162　新宿区河田町8－1
高島　茂雄	山口大学大学院理学研究科	〒753　山口市大字吉田1677－1
川端　広一	福山大学工学部生物工学科	〒729－02　福山市学園町1番地三蔵985
中川慎一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科応用遺伝学教室	〒113　文京区弥生1－1－1
田中由岐子	東北大学大学院理学研究科生物学	〒980－77　仙台市青葉区荒巻字青葉
伊藤美樹子	東北大学大学院理学研究科生物学前田研究室	〒980－77　仙台市青葉区荒巻字青葉
城野　英明	関西学院大学理学部	〒662　西宮市上ヶ原一番町1－155
森　　英俊	東京大学大学院農学生命科学研究科 応用遺伝学研究室	〒113　文京区弥生1－1－1
田村　　勝	国立遺伝学研究所	〒411　三島市谷田1111

牧野　茂	国立遺伝学研究所哺乳動物遺伝研究室	〒411　三島市谷田1111
赤星　軌征	九州大学理学部生物細胞機能学	〒810　福岡市中央区六本松4−2−1
金子　朋未	熊本大学医学部	〒862　熊本市九品寺4−24−1
猪又　顕	北海道大学理学研究科生物科学	
等　泰之	熊本大学医学部発生遺伝	〒862　熊本市九品寺1−1−1
黒田　裕樹	東京大学総合文化研究科広域科学専攻浅島研究室	〒153　目黒区駒場3−8−1

＜住所変更＞

坂井　雅夫	鹿児島大学理学部生命化学教室	〒890　鹿児島市郡元1−21−35
塚原　潤三	鹿児島大学理学部生命化学教室	〒890　鹿児島市郡元1−21−35
藤田　哲也	(財)ルイ・パストゥール医学研究センター研究所	〒606　京都市左京区田中門前町103−5
松谷　悦哉	武田薬品工業㈱創薬第3研究所	〒532　大阪市淀川区十三本町
西川　彰男	島根大学生物資源科学部生物科学科	〒690　松江市西川津町1060
西山　一朗	駒沢女子短期大学生活科	〒206　稲城市坂浜238
絹谷　政江	愛媛大学医学部看護学科基礎看護学講座	〒791−02　愛媛県温泉郡重信町志津川
種田　保穂	横浜国立大学教育学部生物学教室	〒240　横浜市保土ヶ谷区常磐台79−2
広瀬　裕一	琉球大学理学部海洋自然科学科	〒903−01　沖縄県中頭郡西原町字千原1
塔筋　弘章	鹿児島大学理学部生命化学教室	〒890　鹿児島市郡元1−21−35
佐藤　元治	広島県立御調高等学校理科	〒722−03　広島県御調郡御調町大字神204−2
喜納　宏昭	東京大学医科学研究所がん細胞研究部	〒108　港区白金台4−6−1
長尾　慶和	宇都宮大学農学部附属農場	〒321−44　真岡市下篭谷443
牧田　亨介	高知医科大学第二生理学教室	〒783　南国市岡豊町小蓮
西川　慶子	広島大学理学部附属両生類研究施設	〒739　東広島市鏡山1−3−1
田中　良	神戸国際中・高等学校理科	
亀山　俊樹	藤田保健衛生大学総合医科学研究所 応用細胞学研究部門	〒470−11　豊明市沓掛町田楽ヶ窪1−98
坪川　達也	慶應義塾大学生物学教室	〒223　横浜市港北区日吉4−1−1
宮　隆史	東京工業大学生命理工学部生命理学科	〒226　横浜市緑区長津田町4259
高山絵理子	国立遺伝学研究所無脊椎動物遺伝研究室	〒411　三島市谷田1111
岡部　正隆	大阪大学医学部バイオメディカル 教育研究センター神経機能解剖学	〒565　吹田市山田丘2−2
杉山　一郎	大阪教育大学大学院教育研究科理科教育専攻	〒582　柏原市旭ヶ丘4−698−1
松本　和幸	東京都立大学理学部生物	
二階堂昌孝	基礎生物学研究所形態形成研究部門	〒444　岡崎市明大寺町字西郷中38

＜退会＞

斎藤　朗子　　佐々木隆行　　野村みどり　　北村富一郎　　中山　泰亮　　小野寺　浩
山崎　仁香　　佐藤　美子　　林　　晴敏

〔賛助会員〕

研究者のニーズにハートで応える**㈱池田理化**　〒101　千代田区鍛冶町1－8－6神田ＫＳビル　ＴＥＬ　03－5256－1051

㈲共進理工“細胞分別”ナイロンメッシュ　〒113　文京区本郷5－13－1ドエル本郷205　ＴＥＬ　03－3813－1073

生物学・生態学洋書のことなら**グリーン洋書㈱**　〒210　川崎市幸区塚越2－260　ＴＥＬ　044－533－0470

生命誌研究館　〒569　高槻市紫町1－1　ＴＥＬ　0726－81－9750

先端テクノロジーをサポートする**日京テクノス㈱**　〒113　文京区本郷2－17－8鈴木ビル　ＴＥＬ　03－3814－2066

㈱ヘリックス研究所　〒292　千葉県木更津市天那1532－3　ＴＥＬ　0438－52－3951

三菱化学生命科学研究所　〒194　町田市南大谷11　ＴＥＬ　0427－24－6226

明治乳業㈱ヘルスサイエンス研究所　〒250　小田原市成田540　ＴＥＬ　0465－37－3661

試薬及び理化学機器販売の**理科研㈱**　〒463　名古屋市守山区元郷2－107　ＴＥＬ　052－798－6151

技術と信頼でライフサイエンスの明日を担う**和研薬㈱**　〒606　京都市左京区北白川西伊織町25　ＴＥＬ　075－721－8111

日本発生生物学会への入会について

同封の「申し込み票」および「会員カード」に必要事項を御記入の上、日本学会事務センター宛お届け下さい。

ご参考までに学会事業の内容をお知らせ致します。

a）学会誌の刊行
Development,Growth & Differentiation
年1巻、6冊刊行

b）年1回、研究発表のほか、招待講演、シンポジウムなどがあり、また、会則による総会が開かれます。大会講演要旨集が予め全会員に配布されます。

c）インフォメーション・サーキュラー
大会の予告、予算案、決算、運営委員会の報告など、学会の事業の連絡やその他会員の消息、関連学会の動きなどを登載したサーキュラーが年3～4回配布されます

d）和文単行書の編集
学会内の委員会の企画により、単行書を編集し刊行しています。会員は（刊行後一定期間に限り）割引価格で購入できます。既刊分は「発生における制御」「初期発生における細胞」「エイジングの生物学」「動物の器官形成」「受精の生物学」「変態の生物学」「発生における分子識別」です。

なお、会費は前納制です。前年度末までに、次年度の会費をご納入下さい。
会費、発送物、入退会、住所変更に関する問い合わせ先は

〒113　東京都文京区本駒込5－16－9 学会センターC21
(財)日本学会事務センター　日本発生生物学会　係
TEL03－5814－5810

学生の方は、学生証のコピーを添付して、お申込み下さい。
なお学生資格は、学部学生、大学院生、及び大学、研究所等で、学生証あるいはそれに準ずる証明書を有する学生、研究生等です。

----------切り取り線----------

日本発生生物学会入会申し込み票

（　年　月　日）

氏名	氏名ローマ字綴り （フル・ネーム）
研究主題（もしくは関心のあるテーマ）	所属機関名とその所在地 （電話　　内線　　）（〒　）
研究材料名（和名・学名など）	（ファックス） eメールアドレス 上記以外に連絡を希望される場合の連絡場所 （自宅の場合は自と記入のこと） （〒　）
会への要望	

（Ⅰ）会員カードの記入要領

1．会員カードはすべてコンピューターに記憶させますので楷書ではっきり記入して下さい。また指定箇所には、「フリガナ」または「ローマ字」で記入して下さい。

2．氏名は点線の左側に姓、右側に名を記入して下さい。

3．郵便番号は所定の欄に記入して下さい。

4．所属機関の名称は原則として、大学の場合には学部・学科まで、会社等の場合には部・課までを記入して下さい。

5．学歴は最終卒業学校名、卒業年（西暦）を記入して下さい。
修士・博士課程在学中の方は研究科、課程まで、学部在学中の方は在学学校名、在学学年を記入して下さい。

6．性別・専門・連絡先（＝会誌等送付先）・会員種別については、該当するものを○でかこんで下さい。

7．本会の会計年度は、1月～12月です。入会年度を所定の欄に必ず記入して下さい。

8．＊印の欄には記入しないで下さい。

（Ⅱ）会費の送金方法について

1．会員カードを返送していただいてから1か月以内に請求書を発行しますので最寄りの郵便局または銀行よりお振り込み下さい。

（注）現住所、所属機関等、会員カードの記載事項に変更があった場合はただちに、書面でご連絡下さい。
入会申込書は必ずご返送下さい。

財団法人　日本学会事務センター
日本発生生物学会会員係
〒133　東京都文京区本駒込5－16－9
学会センターC21
TEL03－5814－5810

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学，医学，薬学，農学をはじめ分子生物学，細胞生物学，遺伝学など，さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり，国内外に約1,300人の会員を持っております。

英文学術雑誌 Development, Growth and Differentiation は，日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し，国内に約1,200部，国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下，本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等，是非ご協力頂きますようお願い致します。

広　告　料

DGD本誌	1　頁	年6回	150,000円
	半　頁	〃	78,000円
インフォメーション	1　頁	年3回	90,000円
サーキュラー	半　頁	〃	45,000円

尚、サーキュラー用の版下作製代は実費をいただきます。裏表紙は1頁10,000円高となります。

申し込み先：日本発生生物学会事務局（浅島 誠）

〒153　東京都目黒区駒場3－8－1
東京大学大学院総合文化研究科生命環境系(生物)
TEL(03)5454-6632(直通) FAX(03)3485 2904

----------切　り　取　り　線----------

広告申し込み書

年　　月　　日

日本発生生物学会　御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

□	DGD本誌	1　頁
□	〃	半　頁
□	サーキュラー	1　頁
□	〃	半　頁

住　所

会社名　　㊞

担当者名
電話番号

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会
会長　岡田益吉

近年，ライフサイエンス，バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ，生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は，発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で，日本を主に，外国の発生学者を混じえて約1,300名を結集しております。発生学は，言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており，最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題，癌細胞の基礎的研究，老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は，これらの分野での活発な研究者を会員としております。又，本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”（DGD）もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては，このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒，本学会趣旨に御賛同の上，賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお，賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され，本会の刊行する欧・和文刊行物（会員名簿を含む）が配布されます。会費は，一口三万円を申し受けております。御入会の際は，入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局（浅島　誠）
〒153　東京都目黒区駒場3－8－1
東京大学大学院総合文化研究科生命環境系(生物)
TEL(03)5454-6632(直通)　FAX(03)3485-2904

切------り------取------り------線

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年　　月　　日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

（＿＿＿＿口＿＿＿＿円）

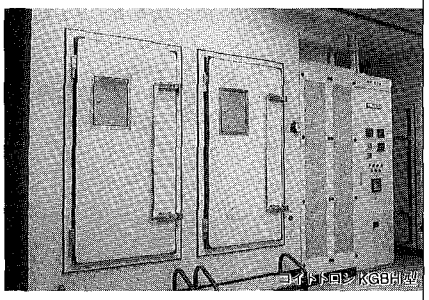
住　所

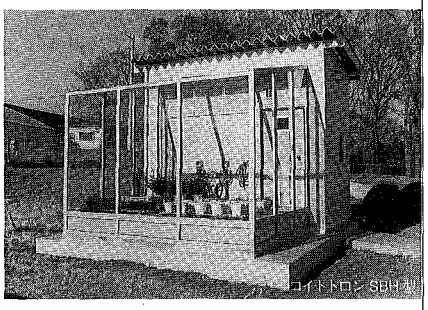
会社名　　㊞

担当者名
電話番号

KOITO
安全と快適を求めて

バイオ関連の試験・研究をバックアップ


コイトトロン KGBH型


コイトトロン SBH型

小糸工業のバイオハザード対応グロースキャビネットは、周囲環境の影響を受けずに、圧力コントロールシステムで実験室内を陰圧に保持します。また、コンパクトで高性能なフィルターユニットとの組み合わせで、実験対象物への空気流による外界からの悪影響を遮断、簡単操作をプラスして、高精度な温・湿度を再現します。

バイオハザード対応グロースキャビネット
コイトトロン **SBH/KGBH** シリーズ

小糸工業株式会社 東京本部 〒108 東京都港区高輪3丁目5番23号（日生高輪台ビル） ☎03(3443)9846 FAX.03(3443)6570
札幌011(722)5211 東北022(225)7501 大阪06(263)6371 九州092(431)0838 筑波0298(51)2311 沖縄098(861)1805

Amenience のヤマト科学

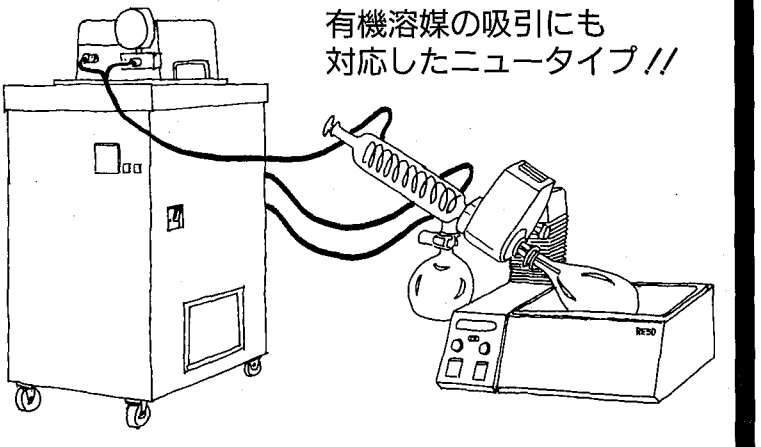
Yamato

新排水基準対応形——ネオクールアスピレーター

CF 600P型

- 減圧と冷却を同時に行うCF600P型は、ジクロロメタン、ベンゼン等の流出を低く抑えており、ロータリーエバポレーターの減圧装置として排水基準をクリアできます。
- 1台で2台のロータリーエバポレーターに接続できます。
- 真空調節器（標準外）の使用により吸引条件を制御できロータリーエバポレーターの回収フラスコへの回収率がアップします。
- 特定フロン対応冷凍機を搭載しています。

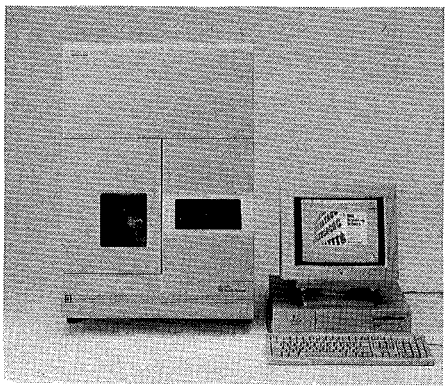
■主な仕様
使用温度範囲　−10〜+30℃
温度調節器　デジタル温度調節器
外形寸法　幅364×奥行494×高さ1,007㎜



ヤマト科学株式会社 本社：〒103 東京都中央区日本橋本町二丁目1番6号
TEL(03)3231-1132

ABI PRISM™ 310 Genetic Analyzer

パフォーマンス UP!



DNAシーケンシング＆DNAフラグメント解析

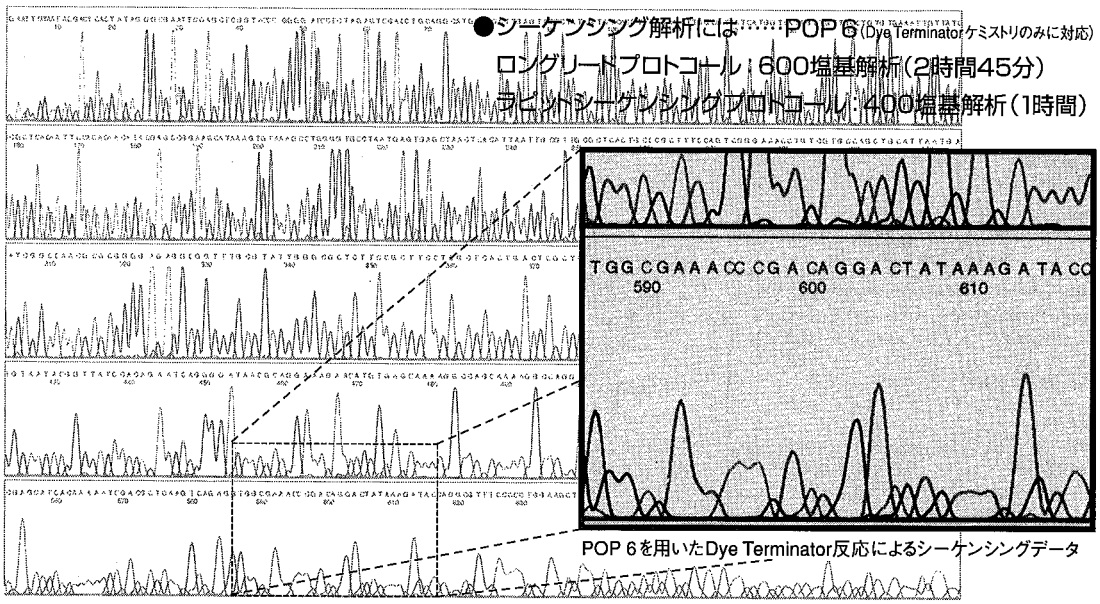
ABI PRISM™ 310ジェネティックアナライザは、多色蛍光標識技術とキャピラリ電気泳動技術を統合した、サイズ決定・定量などの遺伝子解析および核酸の配列解析を行える、初めての自動システムです。デビュー以来、多くの施設に導入され、ご好評を頂いています。このたび、新しいポリマー "**P**erformance **O**ptimized **P**olymer (POP)" を開発し、より良好な結果を手にして頂けるようになりました。

New

新ポリマー POP４ & POP６ 登場

●GeneScan™ 変性条件系フラグメント解析(STR, micro-satellite, AFLP, differential display等)には……POP４

●シーケンシング解析には……POP６(Dye Terminatorケミストリのみに対応)
ロングリードプロトコール：600塩基解析(2時間45分)
ラピッドシーケンシングプロトコール：400塩基解析(1時間)



POP 6を用いたDye Terminator反応によるシーケンシングデータ

PE Applied Biosystems 株式会社 パーキン エルマー ジャパン
アプライド バイオシステムズ事業部

本　社●〒279 千葉県浦安市美浜1-9-2 ☎047(380)8500/FAX 047(380)8505
名古屋●〒464 愛知県名古屋市千種区池下町2-15 ☎052(764)1201/FAX 052(764)1202
大　阪●〒564 大阪府吹田市豊津町5-3 ☎06(389)1201/FAX 06(389)1206
福　岡●〒810 福岡県福岡市中央区赤坂1-16-10 ☎092(771)2755/FAX 092(771)2756

URL address http://www.perkin-elmer.com/ab

研究用試薬

ザイナキシス社

生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technologyに基づく細胞染色法で，細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26蛍光色素と希釈液とを組み合わせた，細胞蛍光標識キットです.

細胞機能に影響しません

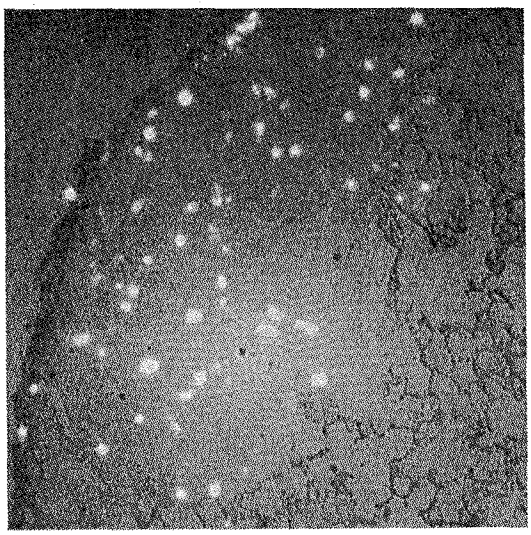
細胞と数分間混合するだけで，生細胞をその機能を損うことなく染色可能で，細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します.

簡便です

従来^{51}Cr等を用いて行われていたLAK細胞のモニタリングやNK活性の測定が簡便に，しかも安全に行うことができます.

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合，PKH26ではin vivoでその溶出の半減期が100日以上を示し，長期のモニタリングが可能です.



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.
マウス肺癌組織に浸潤している，PKH26で染色したIL-2処理リンパ球が観察されます.

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元 大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部
〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)
東京 (03)3828-6544(代表)

講談社の自然科学専門書

英語論文セミナー　現代の発生生物学

丸山　工作　監修／浅島　誠・大日方　昂・松田　良一　編集

A4・174頁・本体価格3,398円

現代発生生物学の展開を英語論文でたどる。ゲノムの不変性を示した核移植の論文から、細胞接着、ホメオボックス遺伝子、アポトーシス、細胞分化誘導因子など、発生生物学の新しいテーマを扱った論文を紹介。

英語論文セミナー　現代の細胞生物学

丸山　工作　監修／馬渕　一誠・山本　正幸　編集

A4・174頁・本体価格3,398円

英語論文で解き明かす現代細胞生物学の真髄。細胞運動の分子装置と細胞骨格、シグナル伝達とがん遺伝子、細胞膜における受容体やチャネルの働きなど、ますます発展する細胞生物学の核となる論文を紹介する。

英語論文セミナー　現代の分子生物学

丸山　工作　監修／渡辺　公綱・桂　勲　編集

A4・174頁・本体価格3,400円

この一冊で珠玉の英語論文がスラスラ読める。現代分子生物学にインパクトを与えた論文18編を精選し、第一線の研究者が解説と訳注を執筆。遺伝子発現、RNAワールド、分子シャペロンなど興味深いテーマを満載。

※上記本体価格に消費税が別に加算されます。

東京都文京区音羽２－12－21
振替　東京８－3930

講談社

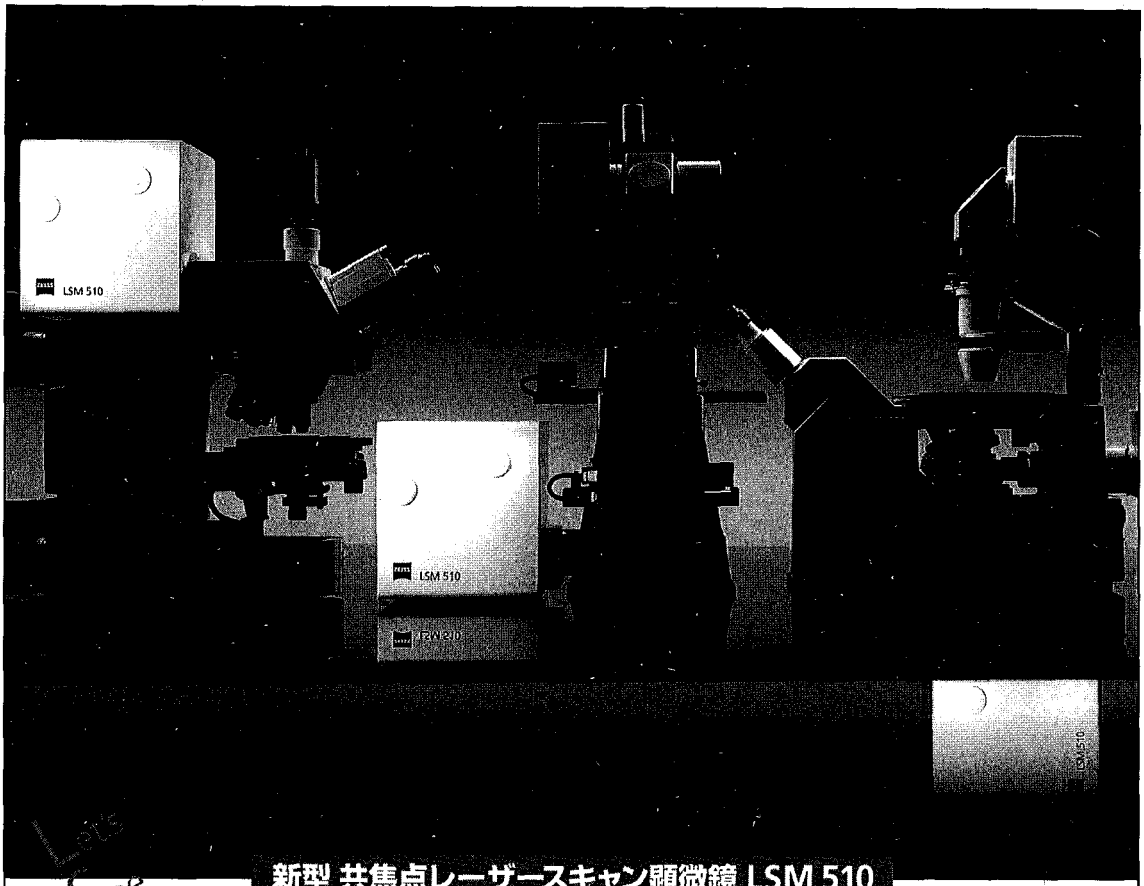
編集部☎03(3235)3701
販売部☎03(5395)3624

Memo

Memo

Memo

Memo



Less
See
More

新型 共焦点レーザースキャン顕微鏡 LSM 510

コンパクトそして多機能

一点の妥協もなく

あなたが評価するのは柔軟な対応力ですか？それとも最高のテクノロジーでしょうか？
LSM510は、その全てを備えています。
革新的な最高の技術、極めて扱いやすいソフトウェアがもたらす抜群の操作性、コンパクトで交換容易なスキャニングモジュールなど。
徹底した妥協を許さない物作りの精神が、ここにあります。

斬新なスキャニング手法

極めてユニークなスキャニング法を採用、スキャニングエリアの設定も自由自在。従って、思いのままの不定形のスキャンが可能です。
全ての3D表示、各種測定法と相まって、試料情報を余すところなく表現します。
かつて、顕微鏡に抱かれていた様々な期待が、今ここに実現します。

新しい品質基準の画像

蛍光の4ch、同時取得、各ピンホールはコンピュータコントロールされ、2,048×2,048ピクセルの高精細スキャン、4×12bitの高分解能をはじめとして、積算、オーバサンプリング、フォトンカウンティングなど、LSM510の諸機能は、全て研究者への奉仕にあります。

ZEISS

ドイツ、ツァイスグループ
カールツァイス株式会社 顕微鏡部
〒160 東京都新宿区本塩町22番地
☎03-3355-0332　Fax.03-3358-7554
大阪☎06-282-4322　名古屋☎052-777-1411
福岡☎092-713-7821　仙台☎022-224-5621